繋いだ手＜コ哀＞

うさちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
繋いだ手＜コ哀＞

【Ｎコード】
Ｎ７５９０Ｃ

【作者名】
うさちゃん

【あらすじ】
突然告げられた言葉。ただ君を守りたいだけなのに。

「工藤君…ごめんなさい」

それは本当に唐突だった。
灰原が突然そう呟いた。
「…？　どうした？なんかあったのか？」
俺は怪訝そうな顔をして言った。

「バレたのよ、私の正体が…。あなたを幼児化させた、あの組織にね…」
「なに！？」

うまく状況が飲み込めない。
登下校や学校にいる間はこいつと一緒だったはずだ。
一体どこでどーやって奴らに気づかれたというんだ？オレが頭の中をフル回転させていると、灰原は言った。
「どうして彼らが私の正体に気づいたのかは分からないけど、恐らくこの米花町で偶然私を目撃したんでしょうね…。昨日、博士の家に彼らがやってきて…もう一度組織に戻ってこいと言われたわ…」
「じょ、冗談だろ…？」

オレは恐る恐る聞いたが、灰原の目は真剣だった。

「安心して？私が組織に戻ればあなたも博士も…もちろん他の人にも手は出さないようだから…」
灰原は口元を緩めてそう言うと、俯いた。

「私が戻らなかったら皆殺されるわ…」
俯いてはいるが、自嘲気味に笑っているのがわかる。

オレは知ってる。
灰原がいつもこんな表情を浮かべるときは、素直じゃないとき。強がっているとき。
だから、守りたくなるんだ。

「オレが何とかしてやっからここにいろ！奴らと真っ向勝負してやろうじゃねえか…！」

ＦＢＩもいるし、作戦を練れば何とかなるかもしれない。

そんなことを考えていたが、それはすぐに灰原の一言で遮られた。
「ダメよ工藤君…」

灰原は少し悲しそうに真っ直ぐオレを見た。

「あなたや他の人を巻き込みたくないの…。組織と向き合うことが、どんなに危険なことか分かるでしょ？だったらお願い…私のことは放っておいて…」
「灰原……」

オレは何も出来ないのか？

いつも灰原を守ってきたのに、
結局は何も出来ない無力な探偵かよ…

「あなたがそんな顔する必要ないのよ？　私は元いた場所に…あなたと私が出会う前の状態に戻るだけ。だから…私のことは忘れて今まで通り生きてちょうだい…」
「……」
「心配しないで？組織に戻れば薬のデータも入手出来るし、ＡＰＴＸ４８６９の解毒剤も完成する可能性がある。もし完成したら、組織にバレないようにあなたに薬を届けるから…」
「薬のことなんてどーでもいい！！行くなよ灰原！！」

「…ごめんなさい…」
灰原はオレに背を向けて、闇に向かって歩いていく。

「待てよ…待ってくれ！」
「彼女のこと…大切にしなさいよ？」

まただ。
またそういう表情をする。
自嘲気味な笑み。悲しそうな瞳。
そうやっていつも自分一人で不幸を背負うから、本気で守りたくなるんだ。

けど、腕を伸ばしても届かない。
走っても前に進まない。
闇に飲み込まれそうなあの背中を、オレは必死に追いかける。

「行くな、灰原ぁーーッッ！！！！！」

そう叫んだ瞬間、オレの視界が明るくなった。
そこは見慣れた教室で、周りには見慣れた顔がたくさんある。
小林先生もみんなも、オレをきょとんとした顔で見ている。

もちろん、隣に座っているアイツも。

「あ、あれ…？」
今までのは全部夢…？

小林先生がオレに近づく。
「コナン君？授業中に居眠りはダメよ？」
「あ、ごめんなさい…」

「おい、コナン。オメー大丈夫か？」
「いきなり大声出さないでくださいよ…」

「いきなり哀ちゃんのこと呼ぶから、歩美びっくりしちゃった！」

「わ、悪ぃ悪ぃ…」
うっわ、オレって超恥ずかしい…
きっと灰原のやつ、オレのコトからかうんだろうな…

皮肉を言われるのを覚悟して、灰原のほうに顔を向けた。

しかし、待っていたのは皮肉でも、呆れ顔でもなく、
複雑そうに優しい笑みを浮かべた灰原だった。

「あ、あれ…？」
予想外だった。てっきりバカにされると思っていたから。

「どこにも行かないわよ…」
「は…いばら…」
「心配してくれたんでしょ？ありがと…」

「……あのよ…もし灰原の正体が奴らにバレたとしても、オレが絶対に守るから…だから…」
「クス…どこにも行かないって言ったでしょ？あなたこそ、消えたりしないでよね…」
「ったりめーだ…」

灰原の顔を見て、オレは安堵した。
だけど、これが本当に現実なのか判らなかった。

またこれが夢で、灰原に手が届かなかったら…

そう思うとオレは居てもたってもいられなくなった。

ちゃんと灰原がここにいるってことを実感したくて、オレは灰原の手を握った。

「え…？」
「少しだけ…」

夢とは違い、ちゃんと灰原に触れることが出来る。
ちゃんとオレの側に灰原がいる。

この手が離れぬよう、ずっと君を守ると決めた。

＊終＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7590c/

繋いだ手＜コ哀＞

2010年11月4日13時45分発行